

これからの森林風景計画の行方

深町 加津枝

(ふかまち かつえ、京都大学大学院農学研究科)

1929年に田村剛が「森林風景計画」を著して以降、森林風景計画学は、風景という観点から森林をいかに取り扱うのかを主題とした学問として発展してきた。そして今日、風景は空間の広がりや時間の流れが映し込まれた人の暮らしぶりを示す指標としてとらえられ、総合的、包括的に森林のあり方を考えていくためのアプローチとして期待されている。

それでは、筆者が長年関わってきた京都・嵐山の森林を事例にしなが、これからの森林風景計画の行方についてもう少し具体的に考えてみたい。嵐山は日本を代表する名勝地であり、それを特徴づけるのは渡月橋、大堰川、そして周辺の森林である。かつては薪や柴などの生活資材を供給する場であったが、平安期以降、アカマツやヤマザクラ、イロハモミジを主体とする森林風景が形成されてきた。天龍寺の社嶺であった森林が明治期になり国有林に移管されると、様々な法制度に基づいた風景の保護が図られるようになった。

明治期以降、公的な関与が深まって嵐山の森林は外から眺めるだけの対象となり、人々の暮らしからは遠ざかっていった。そして、昭和期以降になるとマツ枯れや常緑樹林化、シカやサルによる被害などによって、森林風景が大きく変化した。一方、歴史的な森林風景の維持は施業のあり方に主眼がおかれ、地元住民との関わりについては言及されてこなかった。また、国有林としての管理計画が樹立されるに従い、周辺の森林や河川、集落との関係は希薄になっていった。

このような状況に対し、2009年より行政、地元関係者、専門家が参画した意見交換会が開催され、「嵐山国有林の今後の取扱方針」がとりまとめられた。また、2010年には専門家と地元住民が主体となって森林風景、シカ対策、山地保全という観点からの現地調査と普及啓発活動が行われ、地元住民が国有林の管理に関わる枠組みが整ってきた。現地調査で嵐山の森林を歩いた参加者の一人は、「小さい頃から嵐山で大きくなったつもりでしたが、全く山のことなど見向きもしませんでした。今回、山に手を入れなければということがわかり、どの段階でやって良いのかというのは難しいと思いますが、昔の絵図のようにマツとかモミジ、サクラの多い嵐山にしていったらもっ

と誇れると思いました。」と感想を語っている。専門家とともに現地を歩く回数を重ねることが、自らの暮らしと森林とを結びつけ、関わりを持つことの大事さを実感する機会となったといえよう。



森林風景に関する調査(2010年3月、京都・嵐山にて)

長年にわたる人と自然とのかかわりの中で形成されてきた森林風景の保全や活用には、森林をとりまく空間や時間軸の広がりのみならず、地元住民とのつながりを考慮していく必要がある。それは、里山のような地元住民の生活と結びついてきた森林のみならず、嵐山のような名勝地あるいは公的な位置づけの強い森林においても当てはまる場合が多い。一方、今までの森林風景計画においては、人々がそれぞれの地域の中でどのような眼差しで森林をとらえ、暮らしに根ざした場として関わっていいのかを指し示す研究の蓄積が十分とはいえなかった。今後は暮らしと乖離せず、いかに身近な森林として人や地域が関わり続けていく道筋を見いだせるかが重要な鍵となる。そして、保健・レクリエーション機能あるいは文化機能といった森林の機能を発揮するための研究にとどまることなく、森林に関わる人や地域を理解するための学問としての進展にも力を注ぐ必要があろう。森林に対する温かい眼差しと具体的な関わりこそが、地域固有の森林風景、そして文化を未来に継承する大きな原動力となると確信している。

(専門：森林風景計画学)

参考文献

塩田敏志編・著(2008)「現代林学講義・8 森林風景計画学」地球社、190ページ